

病害虫発生予察情報(9月予報)

令和6年8月28日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	いもち病 (穂いもち)	発生量：少 (発病株率 0.1%)	8月上中旬の葉いもち発生量：少 (－) 8月上中旬の穂いもち発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：多い (＋)
	紋枯病	発生量：やや多 (発病株率 11.3%)	8月上中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	トビイロウンカ	発生量：少 (寄生数 0.7頭/株)	8月上中旬発生量：少 (－) 8月の成虫誘殺数：少(誘殺なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	斑点米カメムシ類	発生量：多	8月上中旬発生量：多 (＋) 8月の成虫誘殺数：並～多 (±～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	コブノメイガ	発生量：多 (被害株率 6.2%)	8月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
温州みかん	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.02)	8月発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	黒点病	発生量：多 (発病度 1.0)	8月発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	ミカンハダニ	発生量：やや多 (寄生葉率 2.0%)	8月発生量：やや多 (＋) ただし、東部：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (寄生果率 0.1%)	8月発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.5)	8月発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
かき	ハマキムシ類	発生量：並 (被害葉率 1.2%)	8月中旬発生量：やや少 (－) フェロモントラップ誘殺数：並～やや少(±～－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
果樹全般	果樹カメムシ類	飛来数：多	予察灯誘殺数：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) ヒノキ・スギ着果量：多 (＋) ヒノキ寄生数：多 (＋) ヒノキ球果吸汁痕数：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
茶	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 29.1 葉/1.25m ²)	8月発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：多い (＋)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (叩き落とし虫数 4.8 頭/4カ所)	8月発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 1.1 頭/4カ所)	8月発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 1.0 葉/1.25 m ²)	8月発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：多い (±)
	ヨモギエダシャク	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4カ所)	8月発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
	カンザワハダニ	発生量：多 (寄生葉率 2.7%)	8月発生量：多 (＋) 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 (寄生株率 1.7%) 発生時期：やや早い	8月発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：多い (－)
ねぎ (白ねぎ)	疫病	発生量：やや少 (発病株率 1.1%)	8月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 (発病株率 4.7%)	8月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	シロイチモジヨトウ	発生量：多 (寄生株率 1.6%)	8月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率 40.6%)	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率 13.5%)	8月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	炭疽病	発生量：多 (10月発病株率 1.9%)	8月上旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	うどんこ病	発生量：少 (10月発病株率 1.4%)	8月上旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：多い (±)
	ハダニ類	発生量：多 (10月寄生株率 12.9%)	8月上旬発生量：並 (±) ただし、東部・中遠：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (±)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (10月寄生株率 0.6%)	8月上旬発生量：並 (±) 8月誘殺数：並～やや少 (±～-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (±)
作物全般	オオタバコガ	発生量：やや多	フェロモントラップ誘殺数：並～やや少 (±～-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (-)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害虫防除所HP
が新しくなりました。



静岡県病害虫防除所HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos-higoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

巡回時の生育は早期栽培が概ね乳熟期～成熟期、普通期栽培が概ね出穂期～乳熟期であった（調査期間：8月8～16日）。病害虫防除員からのアンケート調査によると、生育は平年より早い傾向。

●いもち病（穂いもち）

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、県全体の葉いもちの平均発病株率は0.5%（平年2.3%）と平年より少なかった。
- ・8月上中旬の巡回調査では、穂いもちの発病は確認されなかった（平年平均発病株率0.04%）。
- ・本病は葉いもちを主要な伝染源とし、出穂以降、穂の各部に付着した病原菌により発病する。低温および降雨は本病の発生を助長する。1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・葉いもちの急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・現在、上位葉に発生している葉いもちは、穂いもちの発生を助長する。そのため、葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの防除を適期（穂ばらみ期～穂揃期）に2回行う。
- ・さらに多発が予想される場合は傾穂期に追加防除を行う。
- ・常発地では適期に薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は[日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページ「殺菌剤使用ガイドライン」](#)を参照。

●紋枯病

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は5.2%（平年6.7%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合は速やかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、平均寄生数が0.02頭（平年0.05頭/株）と平年より少なかった。
- ・県内4ヶ所の予察灯では、8月は第4半旬まで誘殺が確認されておらず、平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・9月の気温が高い場合には急増することがあるので注意する。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（イネカメムシ、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・8月上中旬の水田におけるすくい取り調査では、平均捕獲数は2.3頭/30回振り（平年1.5頭）と平年より多かった。
- ・県内4ヶ所の予察灯における8月1～15日の合計誘殺数は、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメおよびイネカメムシの誘殺数は平年並～多く推移しており、ミナミアオカメムシの誘殺数は平年並に推移している。なお、誘殺数データは[静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」](#)で提供している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・出穂後は、水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・穂揃期（成虫侵入期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態））とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。
- ・イネカメムシの発生が目立つ場合は、不稔対策として出穂期（成虫侵入期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態））に、斑点米対策に出穂期から7～10日後（幼虫ふ化期）に薬剤散布を行うと良い。
- ・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤については、[静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準](#)を確認する。
- ・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は[農林水産省ホームページ](#)を参照する。

●コブノメイガ

- ・8月上中旬の巡回調査では、平均被害株率は9.3%（平年2.4%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。
- ・出穂期頃の水稲が加害されると登熟歩合が低下するので、成幼虫の発生状況を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫の発生ピークから7～10日後に相当する若齢幼虫期に薬剤を散布する。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は数日早く、果実の肥大は平年並～やや悪い産地が多い。また、日焼け果の発生が多い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、果実の発病度は0.38（平年0.02）、葉の発病度は0.5（平年0.1）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 病原細菌の生育適温は20～30℃であり、病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し感染する。
- ・ 台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報とは場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。
- ・ 6月以降の銅剤散布は中晩柑類に比べ薬害が出やすいため注意する。
- ・ ミカンハモグリガの被害部は本病の発生を助長するため、本種の防除を行う。
- ・ 発病枝は伝染源となるので、できるだけ除去する。特に発病した夏秋枝は除去する。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均発病度は6.4（平年0.9）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 20～27℃の水滴中で孢子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出る。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
- ・ 防除実施の間隔は、25～30日または累積降水量250～300mmを目安とする。アメダスの気象データなどから栽培地域での累積降水量を確認し防除を実施すること。
- ・ 9月以降の後期感染を防止するため、台風の前など、適宜防除を実施する。ただし、早生品種の防除は収穫前日数に注意して行うこと。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均寄生葉率は7.4%（平年5.5%）と平年よりやや多かった。ただし、地域別では、東部地域で15.0%（平年4.7%）、中部地域で6.8%（平年8.2%）、西部地域で0.3%（平年4.5%）と東部地域での発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均寄生果率 0.03%（平成 0.06%）、果梗部被害度 0.3（平成 1.0）、果頂部被害度 0（平成 0.1）と、いずれも平成よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成より多いが、気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ アメダス気象データを用いた予測によると、今後の気温が平成並で推移した場合、各世代成虫の発生ピークは、第 6 世代で 8 月 14～29 日（既にピークを迎えた産地もある）、第 7 世代で 8 月 31～9 月 19 日、第 8 世代で 9 月 20 日～10 月 18 日と予想される（産地により発生時期が異なる）。なお、各地域における発生時期予測の詳細は、[静岡県病害虫防除所ホームページ「防除時期等予測」](#)を参照する。
- ・ 本種各世代において、飛来最盛日の 1 週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
- ・ 普通温州園では寄生果率 10%を目安に防除を行う。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、果実の平均発病度は 1.6（平成 0.4）、葉の発病度は 2.4（平成 0.4）と平成より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 病原細菌の生育適温は 20～30℃であり、病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し感染する。
- ・ 台風などの強風を伴う降雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する可能性がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報とは場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。
- ・ ミカンハモグリガの被害部は本病の発生を助長するため、本種の防除を行う。
- ・ 発病枝は伝染源となるので、できるだけ除去する。特に発病した夏秋枝は除去する。

【かき】

<生育の概況等>

生育や果実の肥大は産地によりばらついている。また、日焼け果の発生が多い。

●ハマキムシ類

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では平均被害葉率は 0.2%（平成 0.5%）と平成よりやや少なかった。
- ・ 浜松市内のフェロモントラップにおける 8 月以降の誘殺数は、平成並～やや少なくて推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成より多いが、気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける成虫の誘殺状況に注意し、適期に防除する。なお、誘殺データは[静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」](#)を参照する。

<その他の病害虫>

●フジコナカイガラムシ

- ・ 8月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年の平均寄生果率 1.0%）。
- ・ 本種は果実とへたの間に寄生しており薬剤が届きにくいいため、丁寧に散布を行う。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 県内4か所の予察灯における8月1～20日の合計誘殺数の平均は、1586頭（平年152頭、平年比10.4倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが926頭（平年366頭）、ツヤアオカメムシが325頭（平年66.8頭）、クサギカメムシが335頭（平年121頭）であった。
- ・ 県内6か所のフェロモントラップにおける8月1～20日の合計誘殺数の平均は、295頭（平年167頭、平年比1.8倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが292頭（平年159頭）、ツヤアオカメムシが0.8頭（平年5.8頭）、クサギカメムシが2.9頭（平年2.1頭）であった。
- ・ ヒノキ・スギ球果の着果量（指数）は、県平均7.1（平年4.4、平年比1.6倍）と平年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと本虫は増えやすくなる。
- ・ 8月のヒノキ球果における平均寄生数は、10結果枝あたり13.1頭（平年3.1頭、平年比4.2倍）と平年より多かった。
- ・ 8月のヒノキ球果における球果1個あたりの本虫の吸汁痕数は、平均15.2（平年10.1、平年比1.5倍）と平年より多かった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が25を超えると、本虫はヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。
- ・ 果樹関係の病害虫防除員18名からの報告によると、本虫の発生について9名が「多い」または「やや多い」と回答した。また、一部の果樹園で本虫の飛来を確認したとの情報が複数寄せられている。
- ・ 以上をまとめると、予察灯への誘殺数、フェロモントラップへの誘殺数、ヒノキ・スギ着果量、ヒノキでの寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数は、いずれも平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。
- ・ 1か月予報を加味すると、9月の果樹園への成虫飛来数は平年より多いと予想される。

防除対策

- ・ ヒノキ球果での本虫吸汁痕数をもとにした予測式（堤、2003）によるヒノキからの離脱予測日（果樹園への飛来予測日）は、9月5～10日頃（地域により異なる）と予想される。ただし、吸汁痕数が最も多い地点での飛来予測日は8月29日頃と予想される。また、高温等により本虫が急増し、ヒノキ・スギ球果を吸い尽くすと、新たな餌を求めて果樹園へ早期に飛来する可能性もあるため注意する。
- ・ 本虫の飛来に細心の注意を払い、ほ場で少数でも発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に直ちに薬剤防除を行う。また、成虫の移動範囲は広いとため、地域での一斉防除が効果的である。なお、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合がありますので注意する。
- ・ [静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」](#)では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ・スギ球果の着果量、球果における寄生数、ヒノキ球果での吸汁痕数、果樹園への飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。

【茶】

<生育の概況等>

秋芽の生育は萌芽前の地域が多いが、茶園の管理によりばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均発病葉数は7.2葉/1.25㎡(平年23.7葉/1.25㎡)と平年よりも少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する(分生子の発芽適温 22~27℃)。

防除対策

- ・ 本病の感染には、新芽生育期に降雨による胞子の飛散と10時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ20日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早め(萌芽期~2葉期)に防除を行う。秋冬番茶を摘採する茶園で伝染源が多いほ場では、速やかに感染後の有効期間が長い浸透性殺菌剤を散布する。一方、生育中期以降に降雨があった場合は、たとえ感染しても秋冬番茶の摘採や、秋の整枝作業で、新芽の上部は症状が出る前に刈られるので、防除の必要はない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は23.3頭/4カ所(平年9.3頭/4カ所)と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、秋芽の萌芽期~開葉初期に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.8頭/4カ所(平年0.9頭/4カ所)と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、秋芽の萌芽期~開葉初期に防除を行う。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均巻葉数は0.2葉/1.25㎡(平年1.1葉/1.25㎡)と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは[静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」](#)で提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.1頭/4カ所（平年0.1頭/4カ所）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 平年は9月に幼虫の発生が見られる。茶園内で局所的に発生するので茶園をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、樹冠面の平均寄生葉率は10.0%（平年3.3%）と平年より多かった。また、報告のあった防除員12名中8名が、多あるいはやや多の回答だった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高い。茶園の乾燥が続くと、天敵のカブリダニ類の増殖が抑制され、本種の発生が助長される恐れがある。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園や、発生の認められている茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択し、直ちに防除を行う。
- ・ 降雨が少ない場合は急激に増殖する恐れがある。茶園の発生に注意し、早期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均寄生株率は2.8%（平年5.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を特には助長しない。
- ・ アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、8月27日の計算によると平年より4日早い9月8日と予想される。

防除対策

- ・ 地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については[静岡県病害虫防除所ホームページ「害虫誘殺グラフ」](#)で提供している。なお、7月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

<その他の病害虫>

●褐色円星病

- ・ 本病は、春先になって落葉が始まってからの防除では効果がない。一番茶摘採期に発生の多かった茶園や二番茶残葉に緑斑症状が多数見られる茶園では、秋芽の生育期～硬化期に必ず1～2回防除する。

●赤焼病

- ・ つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝や茎葉内に病原細菌が残存して越冬している。この菌が秋以降、台風の日雨による傷などで増殖し、冬の発病につながるため、台風の通過前後に薬剤散布を実施し、菌密度を下げておく。

●チャノホコリダニ

- ・ 8月中旬～9月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

【ねぎ】

<生育の概況等>

生育は平年並で推移している。

●疫病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.04%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（病原菌生育適温 28～30℃）。

防除対策

- ・ 多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。
- ・ 窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 3.5%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。
- ・ 風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除に努める。
- ・ 薬剤防除は、予防散布または発病初期の防除に努める。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 4.9%（平年 1.4%）と平年よりも多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年9月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。
- ・ すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 8.6%（平年 28.0%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 新系統の発生により、葉が真っ白くなる被害が散見されている。多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 31.4%（平年 22.0%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。
- ・ 本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類への伝染源となるため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

【いちご】

<生育の概況等>

苗の生育はほぼ平年並～やや遅く推移している。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均発病株率は 1.3%（平年 1.7%）と平年並であった。ただし、一部ほ場では多発していたため、注意する。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病の生育適温は 25℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。
- ・ 発病株からその周囲へと伝染しやすいため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株はビニール袋に入れほ場外へ出し、殺菌処理をしてから残さを処分する。
- ・ 本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元灌水など水の跳ね返りを防ぐ形で灌水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行うこと。
- ・ 発病株や発病が疑われる株は、定植苗には使用せず、本ほへ持ち込まないこと。
- ・ 発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後、親株からの切り離しなど株を傷つけるような作業後は重点的に防除を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行うこと。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほの巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率 1.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であるため高温期の発病は抑制される。そのため本病の発生が停滞、終息したように見えるが、9月以降の気温の低下とともに再び発生が増加するため注意する。
- ・ 6～7月に発生がみられたほ場では薬剤散布による予防を継続し、発病葉の除去を行う。病原を本ほに持ち込まぬよう、無病苗の定植に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は7.3%（平年7.7%）と平年並であった。地域別では、東部地域で12.8%（平年3.4%）、中部地域で0.4%（平年14.6%）、中遠地域で8.0%（平年5.1%）と東部及び中遠地域での発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 育苗期の防除を徹底し、ハダニ類を本ほへ持ち込まないよう注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年0.1%）と平年並であった。
- ・ 県内3か所のフェロモントラップにおける8月1～20日の誘殺数は、平年並～やや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し、若齢のうちに防除する。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

<その他の病害虫>

●コガネムシ類

- ・ 県内3か所の予察灯における8月1～20日の誘殺数は、平年より多く推移している。
- ・ 成虫が苗床に産卵し、その幼虫が根を食害することで生育が妨げられて欠株となる。ポット育苗時や本ほ定植前等に幼虫を対象として薬剤防除を実施する。
- ・ 定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないよう注意する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 県内3カ所のフェロモントラップにおける8月1日～20日の誘殺数は磐田市富丘では平年並に推移しているが、浜松市中央区協和町および中央区伊左地町では平年よりやや少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下するので、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和6年8月22日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 8月24日から9月23日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項	2週目は、気温がかなり高くなる可能性があります。	
向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	降水量	降水量は、多い確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率50%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率70%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	20	30	50
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	10	40	50
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	10	20	70

【予報の対象期間】

1か月	:	8月22日(土)～	9月23日(月)
1週目	:	8月22日(土)～	8月29日(金)
2週目	:	8月30日(土)～	9月6日(金)
3～4週目	:	9月7日(土)～	9月20日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>